多くの人に水道を 上水道100年のあゆみ

創設の時代（明治時代から大正時代）

九州で4番目に水道ができた！

水道建設まで

『伊万里の町中では、飲料にする水が乏しく、市街地本通りの裏にある小川にいろんなものの洗い水や浴湯の排水が流れてくるのが常であったにもかかわらず、下流ではやむを得ず飲料水に混ぜて使っている。暑い気候のときには最も人の健康に害となり、衛生上しばらくも猶予することはできない。このことから飲み水を有田川から引き込もうとする考えが持ちあがっている』ことが、明治16年6月15日付「鎮西日報」（長崎県立図書館所蔵）に掲載されており、この頃から水道建設の論議が始まっています。

この記事の掲載から20年後の明治36年4月8日の「松尾家日誌」には、“当町衛生員、水道の件に付来訪”とあり、建設運動が進んだことがうかがわれます。

年に幾度も上京や上阪していた松尾家の当主廣吉は、都会生活体験に根ざした水道の必要論を説いたのですが、「水に金を出す馬鹿がいるか」という反対論が大勢を占めるなか、建設運動は困難を極めたようです。

しかし、廣吉は私費によりフランス人技師を招き水源地の選定や水道の研究、設計を行うなど、自信をもって運動を継続しました。

明治43年、腸チフスが大流行し、多くの町民が水道の必要性を自覚し、建設賛成者が多くなってきました。

廣吉は、自身が東京で経営する松尾工場の製品（艦船用バルブ）を活用することや当工場の技師久保平吉を派遣することで建設費を軽減できるとして、当時の中村千代松町長に町の直営工事による建設を進言しました。

これをうけ、中村町長は、ついに水道建設を町で取り組むことを決定しました。

明治45年7月設計に着手し、大正2年11月28日、時の内務大臣　原敬の認可を得、3年2月15日着工、4年1月20日通水式を迎えました。

鎮西日報

明治16年6月15日刊「鎮西日報」

今も受け継がれる、先人の熱き心。

大正4年1月上水道落成式

創設期の人物

中村千代松

嘉永2年9月、伊万里町に生まれ、晰山と号する。明治22年、伊万里町議会議員となり後、郡会、県議会議員を歴任し県政発展に寄与しました。

明治26年4月、第2代伊万里町長に就任し、大正10年8月までの28年間にわたり、教育の振興、伊万里鉄道の布設、港湾浚渫、水道創設、衛生事業などに功労がありました。

大正10年8月10日病没。享年73歳でした。

多くの人に水道を
上水道100年のあゆみ

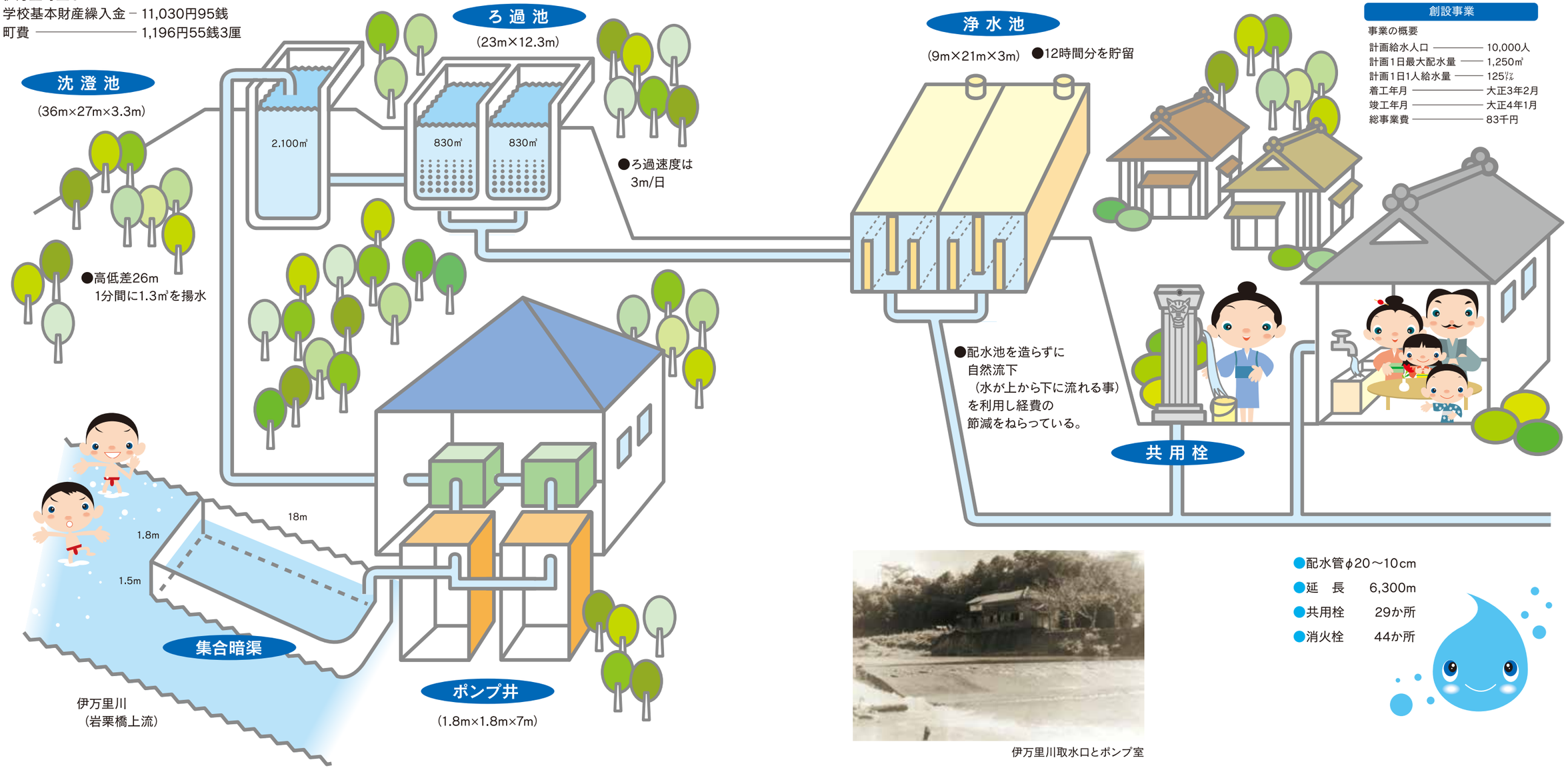
創設時の水道のようす

給水人口 ―――― 約5,000人
総事業費 ―――― 83,227円50銭3厘
（内訳）
町債 ―――― 46,000円
県費補助金 ―――― 25,000円
伊万里町並びに
学校基本財産繰入金 ― 11,030円95銭
町費 ―――― 1,196円55銭3厘

沈澄池

ろ過池

創　設　時



創設事業

事業の概要
計画給水人口 ―――― 10,000人
計画1日最大配水量 ―― 1,250㎥
計画1日1人給水量 ―― 125㍑
着工年月 ―――― 大正3年2月
竣工年月 ―――― 大正4年1月
総事業費 ―――― 83千円

伊万里川取水口とポンプ室

●配水管φ20～10cm
●延　長　6,300m
●共用栓　29か所
●消火栓　44か所

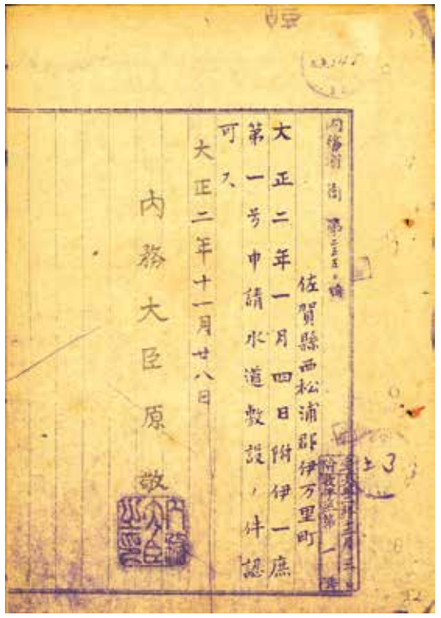
水道開始時の運営方法

水道料金については、戸数割の等級で共用栓利用者と個人宅に専用栓をひく者とに分け、平均額以上を負担する家庭には、専用給水を義務づけて使用料収入の増加を見込んでいました。

維持管理は、事務員1名、職工3名を採用し、事務は助役、収入役が兼務し、技師や運転手を採用しないなど当初から水道経営の安定に努めていました。

砂の入れかえ作業

洗砂作業


佐賀縣西松浦郡伊万里町
第一号申請水道敷設ノ件認可ス
大正二年一月四日附伊一庶
大正二年十一月廿八日
内務大臣原敬

創設認可書

当時の予算状況は、水道使用料4,200円、町費2,344円で収入合計6,544円、支出は人件費・需用費等2,444円、町債償還額は4,018円66銭でした。

25年間の町債の償還が終われば、収益金を一般経費にあてることができ将来有望な事業であるとしていました。

通水を開始した大正4年は、極度の干ばつに見舞われましたが、給水制限もなく水道建設の効果をみることができました。このように水不足の心配がないことから町民こぞって給水の申し込みをし、区域内100%の普及だったそうです。

特集 創設時代のエピソード

伊万里ん町の一大事業

明治から大正にかけての時代、伊万里町にも電話（明治45年普通電話開設）、水道（大正4年）、電気（大正10年変電所設置）が通じ、生活の質がだんだんと向上していきましたが、電話開設当時、水道建設推進派に対して「悪疫退治に水道というが、病気になったら医者に電話せねばならぬ」という話をする反対派もいたそうです。

電話は郵便局（国営）、電気は資本金が1億4千万円余りもある東邦電力と大型の資本をもって事業を行ったのに対し、水道は伊万里町が行った事業で、多額の事業費が実施の大きな妨げになったということは言うまでもありません。

償還金負担調査表

お手伝いさんと水道

明治から大正初期の伊万里町は、ほとんどが商家であり、お手伝いさんは住み込みでした。水汲みは彼女たちの仕事であり、大変な苦労だったと思われます。

時の中村町長は、水道工事費を1万5千円（実際の費用は8万3千円）としたうえで、伊万里町内のお手伝いさんの給金の合計（1万4千円）を算出比較しながら、経済的で衛生的かつ利便的な水道事業を実施することは焦眉の急務であるとしています。

水汲費調査概表

多くの人に水道を
上水道100年のあゆみ

10周年記念

大正14年4月には水道通水開始10周年記念式典が行われました。建設運動の中心となっていた松尾廣吉は、大正10年町長に選ばれ、この10周年記念式典において、「悪い病気なども減って、人口が増加し今日の隆盛を招いた。水道布設費も年毎に償却が済み、町の財源になった」と祝辞を述べています。

町民の喜びも格別であり、町内旦那衆による祝賀行事が繰り出すなど工事の落成式に劣らない賑わいをみせたそうです。

10周年の祝賀行列

創設期の人物 松尾 廣吉

慶応2年12月伊万里町に生まれ、西松浦郡会、伊万里町議会議員を歴任のあと、明治44年貴族院議員に当選、大正10年第3代伊万里町長に就任しました。

明治24年魚問屋大黒組、同30年伊万里魚市場、松尾製薬所を設立経営しました。33年伊万里港荷揚場の建設、37年東京に各種機械製作の松尾工場を創業、さらに黒尾町に日露戦争出征兵士家族の救済事業として伊万里缶詰会社を設立。同41年には、森永太一郎、藤山雷太らとともに西松浦学生寄宿舎「丘隅舎」を東京・小石川に設け、郷党子弟の勉学に寄与しました。

また、同年6月悪疫流行の防止対策として水道布設を提唱するなど、国政、町政の発展に貢献し、町長辞任後は、松尾工場の経営に専念しました。昭和12年1月没。享年72歳でした。